

「うつぼ舟漂着伝承」を構成する諸信仰・文化について

喜多, 路
純真短期大学

<https://doi.org/10.15017/2235355>

出版情報 : 九州人類学会報. 13, pp.27-33, 1985-08-01. Kyushu Anthropological Association
バージョン :
権利関係 :



「うつぼ舟漂着伝承」を構成する諸信仰・文化について

純真女子短期大学 喜 多 路

1

我国の海辺には、海の彼方から神がやって来たという伝承が数多く語られている。その中にとりわけ「うつぼ舟漂着譚」とよび慣われている一群がある。モチーフを同じくする伝承の中で、ある一群だけがそのように他と区別づけられる所以は何であろうか？

斯道の大先達ともいべき柳田国男・折口信夫・三品彰英の「うつぼ舟漂着譚」について説くところをまとめてみると、根幹としては、

1. 乗物乃至容器に納まってやって来る。
2. その乗物・容器は本来嚴重に密閉されたものである。
3. 乗物・容器に入ってやって来るのは本来「神」である。

の3点に要約されるかと思う。同じモチーフでありながら「うつぼ舟漂着譚」とよばれない伝承は、1・2についてまるで意に介さないという違いがみてとれる。「うつぼ舟漂着譚」は、名称どおり「うつぼ（中虚ろな）舟」を欠くべからざる大道具として語る伝承なのである。

次に、筆者の文献渉猟・調査によって蒐集した百例近い伝承の主人公は、圧倒的な数において「高貴な人」なのであるが、内容を分析してみるとそれは総て本質において「神」であり、先達の説くところを裏づけた。従って、以下の論述においては、伝承の主人公達は総て「神」として扱ってゆく。

2

まず蒐集例（92）中圧倒的に多いのは主人公が女神であることである（56例。60%強。一筆者の蒐集例がうつぼ舟漂着譚の総てでないことは言うまでもない。筆者自身採集にあたって特別な1小地域に限った詳細な民俗誌に記載されている事例は、バランスの上から採用しなかった。以下数字は傾向を知る目安として参考にして頂きたい）。更に

その中で37例（66%）は母神である。次に子神18例、男神になるとずっと少なくなつて7例、性別不明・動物・無生物神合わせて11例と続く。どうやらこの伝承の本来の姿は母神・女神が主人公であるように考えられる。（「うつぼ舟漂着譚」において女神が一般であることは、柳田国男・三品彰英も既に指摘しているところである⁽¹⁾）。

伝承内容としては右表のような項目が指摘される。

表 1

	女		母・子	子	男	性別不明	動物	物	計
	母	女							
1. 神として祀られる	6	7	2	7	3	4		3	32
2. 始祖となる	5			4					9
3. 漂着して出産	29						1		30
4. 漂着後結婚出産	3								3
5. 結婚		2							2
6. 死ぬ		4		3					7
7. 殺される		6							6
8. 漂着伝承のみ		5		7	4		1	2	19
9. その他		1						1	2

1・3項が主たる内容であることがわ

かる。但し第1項については、うつぼ舟でやって来るのが神であれば、「神として祀られる」のは当たり前なことで、殊更に論ずる事もあるまい。只、1項と2項は屢々合体して、うつぼ舟でやって来た貴人が何某氏の「始祖となって神に祀られた」という伝承が多い。王朝又は氏族が己を權威づける為にその始祖を神と語る、いわゆる始祖神話であって、そういう意味から1・2項を一括すると、より一層、最も多く語られている内容となる。

3

次に突出して多い内容は3項であるが、「母神が産む」という要素を軸として考えるならば、4項は勿論のこと、「産む」前提である5項の「結婚」も同一觀念の所産ということが出来る。

ところが、母神37例の伝承を検討してゆくと奇妙な点に気がつく。生れてくる子神の父の存在のはっきりしない例があまりにも多過ぎるという事である。まず、子神の父について全く語られていない伝承が9例、4分の1に及ぶ。更に聖母マリア的、姿を見せない神との神婚による懐胎や、もっと非人格的な存在によって孕む、即ち太陽感精型懐胎など（8例）、又神話中の女神に配するに歴史上明らかに存在した天皇を以て子神の父と語る等明らかに後次の作り事である2例等も「父の存在の不確かな」例とみなすと、それは実に半数を超える（51%）のである。

では残る半数近くについては父親がまっとうに存在すると考えてよいかというと、ここにも一つ問題がある。というのは、18例中7例が伝説でなく昔話であることである。「お話」であるからそれなりに話の筋は整えられている。母がいて子が生れる以上父の存在もちゃんと語られている。しかし伝説が土地の人々にかつて信じられて語られ、多く信仰の対象であったのに対し、昔話は「お話」としての興味から、信仰と関わりなく野山を越えて独り歩きするもので、この7例の昔話もその主人公達は「王様とお后」とか「殿様と奥方」といった普通名詞で語られていて、その土地乃至土着の氏族某に密着して信じられている伝承とは自づと一線を画している。にもかかわらずモチーフを同じくする昔話の中から敢てこの7例だけを採用したのは、この7例には主人公の乗物を「うつぼ舟」と明示されていた事による。それを「うつぼ舟漂着」信仰文化圏を示すものとみなして採用に踏み切った例であり、従って厳密に伝承のみに限れば、父の存在のまっとうに語られているのは11例（3分の1）にすぎない。

母神漂着出産伝承において今一つ顕著な特徴がある。それは生まれてくる子神の殆んどが男子だということである（男27、女2、男女複数1、性別不明7）。

父親の存在の稀薄さと子神における男子の圧倒的優位性一該伝承の特色であるこの2点を併せ考える時、うつぼ舟の母神の正体は自づと明白になる。原初の虚無乃至カオスの中にまず存在する大母神、夫無くして男児を産み、その子神を男性原理として神々乃至森羅万象を産む母神一古代農耕文明の最も古い、かつ基層をなす信仰の対象であった原始母神、大地母神、豊饒を司る母神一がそれである。

4

では、女神中母神を除いた残りの女神達はどの様な属性の神々なのであろうか？

この女神達（19例）の殆んど（17例）に共通に語られるのは、「若い」点の強調されている事である。それと今一つ、この若い女神達に纏綿する特色として死の翳が指摘される。表示のように、「死ぬ」のは若い女神達と子神達だけである。とりわけ「殺される」のはこの若い女神達に限られる。それも「助

けて、」と命乞いするのを撲り殺したり、お附きの侍女共々断崖から突き落として皆殺しにしたり…伝承は若い女神達の無惨な殺され様を語る。

若くして殺される女神—という時思い浮べずにいられないのは、インドネシア東部からニューギニアにかけて濃厚な分布を持つ少女神の殺される神話群—ハイヌヴェレ型神話—である。彼女等は豊饒予祝の儀礼としての舞踏の夜（それは成女式でもあるのだが）、舞踏に参加した男達によって殺される。別の伝承では村の男達全員から犯されて殺されると語られ、又神的男性との結婚によって死ぬ、とも語られる。そしてその死体は細切れにされて大地に埋められ、体の各部所がそれぞれ各種の芋になる一芋（主食としての栽培植物）の起源神話である。

我国にも主食たる五穀の起源を説く、女神の殺される神話がある。オオゲツヒメ（古事記）とウケモチの神（日本書紀）の神話がそれである。彼女等は口・鼻・尻等から食物を排泄してスサノヲ又はツクヨミに差し上げた為にそれぞれの神の怒りをかって殺され、体の各部所にそれぞれ五穀が生え出る。「食物神殺しの神話」ということで、常にハイヌヴェレ型神話と比較考察される神話である。

ハイヌヴェレ型神話の名称の由来となった東インドネシア・セラム島ヴェマレ族の該神話の主人公ハイヌヴェレが生前排泄したのは宝物—中国製皿や銅羅や珊瑚など。それらは「プサカ物品」と称される—だった。そしてそれが原因で殺される。うつぼ舟の若い女神達が舟に積みこんだ財宝が原因で殺されたように。

プサカ物品は、異伝によればこの神的少女の殺された遺体の各部が化したものだと語られる。その宝物は遺体の各部が化したと語られる芋と等置の関係にあるのだ。そして現在なおそれらプサカ物品は村の旧家に代々伝えられており、豊饒儀礼に当って神話の少女の遺体と同じく大地に埋められる。^②「少女＝宝物＝芋（主食用植物）」の図式がそこには成り立つ。少女も、同じく生前にその体から食物を出し、殺されて主食としての五穀と化したオオゲツヒメ・ウケモチも、その本態は「主食用植物」だと考えることが出来る。一大母神信仰において、母神（大地）が永遠に存在し、永遠に産み続ける存在であるのに対し、大地から芽生える植物—農耕社会においては栽培植物、それも主食となる植物で代表して観念される—は子神であり、年毎に収穫される（死なねばならぬ）存在なのである。であればハイヌヴェレで代表される南海の神的少女達・オオゲツヒメ・ウケモチは子神である。うつぼ舟の母神が先述したように大地母神であるならば子神達は主食用植物＝食物であり、若いことを強調される女神達も（ハイヌヴェレと共通の諸要素を持つ事からいっても）主食用植物＝子神の一類ということが考えられる。その仮定に立ってみる時、表中「死ぬ」のが子神と若い女神に限って語られている事が肯けるであろう。

うつぼ舟の若い女神達に食物神の機能はみられないが、どの伝承においても主たる積荷が「食物」と「財宝」である事に辛うじて本来の姿を暗示しているといえる。積んである食物についてそれぞれの伝承がそれぞれ様々に述べ立てていて、柳田をして「食事の点ばかりを気にして居る」と歎息せしめるに至る程である。この食物に対する只ならぬ執着は、「食物」が単なる積荷の一ではない事を暗示する。オオゲツヒメ・ウケモチなどの食物の^人^態^化^さ^れ^た神格が、常に身のまわりに己の本態である「食物」を圍繞させていた—食物を排泄し、死体から食用植物を生じた（ハイヌヴェレが芋の別態である宝物を排泄し、死んで芋となったとするのも全く同じ観想である）—ように、舟でやって来る穀神も又己の本態である穀物を身辺に積み込んで来るとする観想も我国にはある。宝船の乗員である七福神の^ほ^{てい}一神布袋和尚の前身はミロクであり、我国においてミロクとは本来米（穀霊）の事であるという。^③「布袋」の語

義そのものが宮田登氏によれば「飯桶」又は「飯袋」を意味するものだという。つまり、食物の尽きせず湧き出る宝物なのだ。布袋和尚自身穀神であり、布袋（米の別態）という宝物を常に携えているだけでなく、宝船には金銀珊瑚綾錦と共に米俵が積み込まれてある。宝船の思想は言うまでもなく中世末から近世にかけて台頭してきた町民文化の価値観から生れた産物であり、より生きるに厳しかった古代においては「宝」とは生命を繋ぐ為の糧食に他ならなかった。海宮からもたらされた宝（神酒の湧く瑠璃壺）が白鳥（穀霊）に化したり、その白鳥の至る処五穀を積んだ積綾船が寄ると語る宮古島の伝説に⁽⁴⁾「宝」＝「食物」の観想と、宝船の前段階の姿を見る事が出来る。それは我国沿海のそここゝに、近世に至るもミロク船一五穀を満載し来って、飢えから人々を救う一の信仰として生きていた。その中でもとりわけ、ミロク船信仰の一拠点である沖縄八重山地方の豊年祭に五穀を携えて来臨するミロクが布袋和尚の姿である事例は、宝船の前身を如実に語る一例といえよう。一「宝」と「食物」を常にその舟に積込んで漂着する若い女神は、以上の考察からも食物神（栽培植物）とみなす事が可能であろう。

若い女神達が栽培植物（子神）ならば、他の子神と「死ぬ」という伝承を共有するのは別に不思議ではないが、では何故彼女達だけに「殺害」が語られるのかという疑問にはなお解答が与えられていない。一ハイヌヴェレ型神話の分布する地域で花嫁が結婚式の前に村の総ての男達に犯される結婚習俗のあることについて、アドルフ・E・イエンゼンは、「結婚式は、同時に少女の殺害や略奪であったような最初の生殖という出来事の記憶を呼び起さねばならないからである⁽⁵⁾」という。犯される事、即ち「処女性の略奪（結婚）」＝「殺害」の図式がギリシア神話にも語られている。コレー（少女）の別称で呼ばれるペルセフォネーは野辺の散策中突然冥府の王に拉致される。この略奪は＝殺害である。そして彼女は冥府の王の後にされる一処女性の略奪＝結婚。しかしエレウシスの秘儀はペルセフォネーの再生を語る。但しその秘儀においてペルセフォネーは単なる「再生する子神」ではなく、産んだ息子を誇らかに差し上げつゝ大地から脱け出て来る一「略奪＝殺害＝結婚」によって彼女は「母」に変容したのである。

「少女→母（産む者）」への変容は、少年→成人男子のそれとは比較にならない決定的（処女性の）破壊一処女としての死一を経なければならないものなのだという観想がここにはみられる。この破壊は必ず他者（男性）によって為される、即ち「殺害」されるのである。

うつぼ舟の若い女神の幾人かが言い合せたように男の生首を携えていると語る例は、彼女達がまた、ハイヌヴェレ型神話の少女神達やペルセフォネーと同類の「母神候補者」である事を物語る。一芋少女の殺害を語る南海の豊饒儀礼に首狩りは不可欠な行事である。そしてその地方において、狩られる首が「椰子の実」と観ぜられている事から考えるに、この人身供儀はこの地方において「最初に死ぬ存在」であり芋少女達を「女（未来の母）」にする男性原理である一群の神的男性一生前排泄した糞がサゴ椰子になったり、死んだ後その頭がココ椰子になったと語られるいわば「椰子男」。彼等も又栽培植物＝子神の一とみなすべきである一の最初の死、及びそれによる食用植物（椰子）の発生と、その初めての摂食を再演する儀式とみなすべきである。神話において芋少女と椰子男に為された処置一焼かれ、切細裂かれ、共食され、一部は豊饒促進の為に大地に埋められ、そしてその首は大事に加工される一が首狩で捕えられた犠牲者に対して全く同じに施される事が、犠牲者が原初の椰子男と観ぜられている事を証拠立てる。「生首」は少女達を女（未来の母）にする男性原理の象徴であり、従って未来に母となるべき少女達にとって欠くべからざる所持品であればこそ、潮路遥かなこの海辺に漂い着くまで、辛うじて携え終せた幾人かがあったのだと考える事が出来る。

うつぼ舟の若い女神達は子神一栽培植物、従って年毎に死なねばならぬ存在一であるとともに、中の幾人かは母神となるべき属性を併せ具えていた一従って彼女等は少女として殺されなければならなかったのである。

5

だからといって「うつぼ舟漂着譚」を直接南海からやって来たものときめこむのは早計であろう。東洋における文化伝播及び民族移動の流れが大陸部から印度支那半島を経て大洋へ拡散してゆくとする定説に従うならば、拡散地域の文化の出発地点をこそ精査すべきである。一まさに印度支那半島北部から中国西南部の広い範囲において、少数民族の間で豊饒儀礼としての首狩りが行われていた。それがごく古い時代からの習俗である事は、雲南省に紀元前後にわたって南蛮一の大国を打ち建てていた滇^{てん}国の王墓・石寨山古墳の出土品の数々が生々しく語る。そしてこの習俗は長く伝えたところでは第二次世界大戦後の中国新政府の解放時に至ってやっと止んだというのであるから、なんと2千有余年連綿と受け継がれていたのである。

石寨山古墳の出土品の数々から、滇^{てん}国人が稲の農耕を為し、蛇神崇拝の信仰を持っていた事も明らかになった。中国周辺の諸国で中国皇帝から授けられた金印が蛇紐であるのは、現在のところ、滇^{てん}国王之印と我が志賀島出土の漢委奴国王印だけである。中国の朝廷が我国古代と雲南の古代の文化に同質性を認めていた事がそれでも推察されるが、雲南から東南アジア北部山地にかけて、現在も我国と共通または我国のその租型とみなされる文物がふんだんにみられる事は、多くの学者の注目するところである。

岡正雄は日本民族の成立を5段階の種族の渡来によると仮定した。そしてその最も古い第一段階として「母系的・秘密結社の・芋栽培一狩猟民文化」（縄文中期以降渡来）を挙げるが、彼が「この文化の経済形態は、おそらく低農耕であって、タロまたはヤムのごとき芋の栽培をおこなっていたであろう⁽⁷⁾」と推定した事から、この第一段階の渡来民を、南海の、現在に至るも低農耕の芋文化を維持している人々と結びつけたがる傾向があるが、そして雲南から東南アジア北部にかけては最も早く稲農耕の始まった地域なのであるが、調査研究の蓄積によって現今ではこの地域も穀物に先行して芋栽培が行われたのではないかと考えられるようになったし、ヤム芋にいたっては雲南が原産地として有力視されている程である。一「母系的・秘密結社の・芋栽培一狩猟民文化」の諸要素総て、中国南部から東南アジア北部の地域の古代の文化と考えて不都合な点はなさそうである。

それにこの第一段階渡来種族の文化において「祖霊がかなたから、妣の国・死者の国から訪来してくるという宗教観念がその基礎にある⁽⁹⁾」のならば、うつぼ舟の母子は多く始祖（祖霊）と語られているし、穀霊も祖霊と観じられている我国であれば、穀霊とみられる若い女神達もまた祖霊の一であり、とすればうつぼ舟で海の彼方一古代において見知らぬ異郷は即ち他界＝死者の国とみなされていた一から神々がやって来るというこの伝承は、いよいよもってこの第一段階の文化に基づくものと思われてくる。

この「うつぼ舟漂着譚」と中国西南部から東南アジア北部のこの地域を決定的に結びつけるのは、南海にはみられない「容器に籠って祖霊が水上を漂う」神話が、この地域にびっしりと分布している事である。とはいえその神話一洪水始祖神話と一般に称される一と我がうつぼ舟漂着譚の間には自づから相違がみられる。

まず異なるのは彼には「海の彼方から来る」という要素がなく、みな「大洪水の水上を漂う」ことに

なっている。海の無い山地という地理上当然なことで、「うつぼ舟漂着譚」の出発地がこの地方であるとするならば、「うつぼ舟…」の方が、海辺や海上を漂っているうちに変化したものと考えるべきであろう。

次に彼においては主人公がまず例外なくと言っていい程兄妹神である。大母神の箇所ですべたように、古い農耕文明の最も古い信仰の基層にあるのは大母神信仰であり、その神話においてまず存在するのは母神である。母神が万物を産むのに男性原理を必要と認識する段階に至って男の子神を産み、母子神信仰の段階に進展する。古く高農耕文明を築き上げたエジプトの母神イシス、シュメールのイナヅナ、バビロニアのイシュタル、ギリシアのガイア他、古い原始母神は総て「息子と交わる者」であった。人知の発達につれてこの母子相姦の神話は、姉弟（兄妹）→叔母・甥→年上の女神と年下の男神、と、最初の組合せの名残を留めながらも近親相姦でない形へと移ってゆく。同じ「祖霊が容器に籠って水上を漂う」モチーフを持ちながら、我国の主役は母神又は母子の神乃至子神であり、中国西南部から東南アジア北部にかけてのがより発展した段階にある兄妹神である事からみても、文化の源流により新しい形態が、拡散してゆく辺地により古形がみられるという文化伝播上の公式にのっとって考えるならば、やはり我がうつぼ舟の出発地は中国西南部～東南アジア北部山地と認めざるを得なくなる。

6

柳田国男は、うつぼ舟伝承において神々の乗って来るうつぼ舟乃至容器の本来の姿は「天然の空洞木と、ひさごとより他は有り得なかった」という⁽¹⁰⁾。東南アジア北部の洪水始祖神話において、兄妹2人だけが身を托す事によって洪水の中を辛うじて生き残る事を得たその容器は、瓠・南瓜・太鼓・臼など様々であるが、中でも瓠が圧倒的に多い。洪水漂蕩要素を伴わない始祖神話・人類起源神話においても、この地域では人祖が瓠から現われたと説くものが多い。松本信廣に至っては、人祖出現は瓠からとする形式が「通則となっておる」⁽¹¹⁾とまで言っている程である。太鼓・臼にしても、この地域では木の幹をくりぬいて作るのであるから、中虚ろの植物である事に変わりはない。神、まして人祖となればなおのこと、入り納まるにはそう出来る「空間」を想像するのが理屈であり、一方に身内に空間を持つ植物への奇異の念があれば、その両者が結びついて身内に空間を持つ植物に他にすぐれて神の宿りを想ったのは当然であろう。

しかしこの地方では、我国と同じく、身内に空間を含んでいない樹木についても、御神木として神の宿りをみる信仰が盛んである。それはこの山地一帯に普遍的な、植物そのものを神とみなす樹木崇拝にまで遡らせることの出来る信仰であると思われる。

すさまじいまでの勢いで繁茂する植物に圧倒されて生きたこの地域の人々の間に、人類のみならず一切のものの起源を植物に由来するとする観念の生じたのは当然であつたろう。そして植物の中に神（人祖）が胚胎する時、それは本質の中に包みこまれ、その上を樹皮でぴたりと蔽われていると観念されたのも又当然な事である。我がうつぼ舟がこの観念から出発しているとすれば、うつぼ舟や容器について嚴重な密閉がしきりに強調されるのもこれ又当然な事であつた。

むすび

うつぼ舟伝承の根底には、農耕民の信仰の基層にある大母神信仰が横たわっている。大母神が男の子神を産み、その子神と交わって神々乃至万物を産む神話の中で、うつぼ舟伝承は始祖神話要素が拡大されたものと考えられる。また子神（若い女神も含めて）の漂着例が母神漂着出産譚に劣らず多い事は、この伝承がほぼ定着する時点では既に、母神信仰から母子神信仰を経て子神信仰へと展開してゆく大母神信仰が最終段階まで発展し尽し、子神信仰に重点が移りつつあった事を示す。

次に、子神のうちの若い女神の伝承内容は、南海の芋少女との近縁が感じられるのであるが、伝承の諸要素の発生源は中国西南部から東南アジア北部のあたりに求めるべきであろう。またうつぼ舟乃至容器に神のこもる要素も、その地域の「植物から神（人祖）の発生する信仰」に、「容器に籠って水上を漂う」要素もこの地域の「洪水始祖神話」に、その発生をみるべきであろうと思われる。

しかし「洪水始祖神話」と違って、我がうつぼ舟は常に海の彼方から寄りつくと言われる。ここに他と違った我国独特の寄神信仰一神も文物も幸も海の彼方からやって来るとする一がうかがえる。

以上述べ来った諸信仰の統合の上に、我がうつぼ舟漂着伝承は成立したという事が出来よう。

注

1. 柳田国男「定本柳田国男集」第9巻181頁、筑摩書房 三品彰英「神話と文化境域」109～111、大八洲出版
2. AD・E・イェンゼン（大林太良他訳）「殺された女神」27～65、弘文堂
3. 宮田登「ミロク信仰の研究」89～97、未来社
4. 大城立裕他「沖縄の伝説」98～99、角川書店
5. AD・E・イェンゼン「殺された女神」37、前出
6. AD・E・イェンゼン「殺された女神」76、前出
7. 岡正雄「異人その他」20～21、言叢社
8. 中尾佐助「現代文明ふたつの源流一照葉樹林文化・硬葉樹林文化」110、朝日選書
9. 岡正雄「異人その他」20～21、前出
10. 柳田国男「定本柳田国男集」第9巻181、前出
11. 松本信廣「東亜民族文化論攷」213、誠文堂新光社